黒犬悪魔×ツンデレ召喚士

表紙イラスト：鈴音れな

伊吹泰郎

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『黒犬悪魔×ツンデレ召喚士』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

黒犬悪魔
×
ツンデレ召喚士
伊吹泰郎
表紙／鈴音れな
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ミランダ

半人前ながら意地っ張りで負けず嫌いな性格の少女。使い魔の少年に好意をもっているが、なかなか素直になれない。才能はあるのだが、未熟なため自分の力をコントロールしきれない。いつかノルの主人に相応しい召喚士になろうという決意を持っている。

ノル

強大な力を持つ大悪魔で、力を使う時には人間の姿になる。本来であればミランダに使役されるはずはないのだが、彼女に一目惚れした弱みで従う。彼女にとっては口うるさい教師役でもある。普段は黒犬の姿をしている。

それは、とある迷宮を探索している途中のできごと――。

扉に刻まれた魔法方陣から召喚されたのは、ヤギの頭の下に人の肉体を持つ、屈強な悪魔だった。

この悪魔、魔界の住人としては下っぱながらも、訓練された兵士十数名を、たった一体で全滅させられるだけの力を持つ。

対するミランダは、迷宮と不釣りあいなほど可憐な顔立ちの少女。

つばの広いトンガリ帽子の下、ツインテールに結われた髪は混じりっ気なしの金髪だし、端がつり上がり気味の瞳は、勝気そうなグリーンにきらめいている。

背は低く、黒いローブに覆われたバストとヒップも起伏に乏しいものの、その分、人形めいた愛らしさなら際立っていた。

白い肌には、雪のような清らかさばかりでなく、健康的な張りもある。

ついでに言うなら、

（今度の術は、絶対に『あいつ』もすごいって言ってくれる！　うぅん、言わせてみせる！）

表情はやる気に漲（みなぎ）っており。

彼女が悪魔と充分な間合いを取り、杖を振るって呪文を唱えれば、十もの光る弾丸が空中に現れる。

「いっけぇぇえっ！」

号令一下、弾丸は矢よりも早く、ヤギ頭に殺到。
しかし、相手が腕を一振りしただけで、その全ては塵同然に消し飛んでしまった。
あまりにあっけない。見事なまでの気合の空回り。
「なんでっ⁉」
ミランダは硬直し、その隙だらけのところへ、悪魔の巨体が容赦なく突っ込んでくる。
「えっ、あっ！」
慌てて構え直す少女であったが、次の呪文を使う余裕などもらえない。
ブンッ！
迫ってきた丸太のような腕を、後退してかわすのがやっとだった。
ブゥンッ！
「ひゃっ……！」
二撃目もどうにか。
しかし、三撃目は完全には避けきれない。
鼻先を拳が通り過ぎると、その風圧だけで体勢が崩れる。足ももつれ、少女はしりもちをついてしまった。
「きゃうっ⁉」
床に敷き詰められた石ブロックの硬さに、小さな悲鳴が洩れて。

慌てて見上げれば、悪魔は余裕を見せるように、ゆっくり腕を上げていた。あの拳を一回叩きつけられるだけで、人の身体などぺちゃんこだ。

「っ……！」

ミランダは思わず、すがるように杖を握ってしまう。

しかし、間一髪。

「駄目だ、ミランダ。もう見ちゃいられないって」

少年めいた低い呆れ声と共に、両者の間へ黒い影――ミランダの言う『あいつ』が割って入った。

その耳は真上にピンと立っていた。湿った鼻は、ヌッと顔の前方に突き出ていた。

四本の足はスラリと長く強靭で、眼光は悪魔を射抜くように鋭い。

フサフサした毛の中、開いた口腔だけが、燃えるような赤い色。

どこからどう見ても、黒犬としか見えない姿である。

だが、たった今喋ったのは、紛れもなくこの犬、ノルなのだ。

ギロリ。

ノルに睨まれるや、優勢だった悪魔は、一歩二歩と後ずさった。

「ギ、ゴッ……ゴッ」

相手が格上であると気付いて、うろたえているかのよう。

その間は僅か数瞬に過ぎなかったが、ノルは素早く次の行動に移る。
ブルルッ！
彼が通り雨か何かを弾くように身を震わせると、黒い霧のようなものが、水滴の代わりに毛皮の先から飛んだ。
そして左右でギュッと凝集し、ノルそっくりの二匹の黒犬に変じる。
直後、思い出したように振り下ろされる、ヤギ頭の重い打撃。
「ノル！」
ミランダが悲鳴を上げた時にはもう、ノルと分身は攻撃を避けていた。
砕けたのは、彼らの足元にあった石製のブロックだ。
その大小の石片が宙へ上がるより早く、ノル達は稲妻のようなジグザグを描いて、ヤギ頭の周囲を駆け巡りだしている。
「ゴ……ォ……」
悪魔の動揺が大きくなった。
オロオロ頭を巡らせ、三つの影を目で捉えようとするものの、まるで追いつかない。間に合わない。
その脇腹へ、首筋へ、分身二体が声もなく喰らいついた。
次の瞬間には、もう決着。

「ウオオォォォォォォッ」

大ダメージを受けたヤギ頭は、悲しげな唸り声と共に、魔界へ追い返されたのである。

「ミランダの魔力弾、あれは減点ものだぞ。力ってのは、分散するほど効果が落ちるんだ。同じ手に押し当てられるのでも、針と板とじゃ、痛みが違うだろ？　滝の水だって、流れを分ければ勢いが格段に弱まる。十割る十が、必ず一になるとは思うなよ」

戦いの後、ノルは暗い通路をミランダと並んで歩きながら、くどくど説教を続けていた。無論、彼はただの犬ではない。この姿は仮のもの。ノルもまた、魔界から召喚された悪魔なのである。

そして半年前、彼を使い魔として呼び出したのが、ミランダだった。だが、二人の間柄は、主従というより、厳しい教師と出来の悪い生徒のよう。

「そ、そりゃそうかもしれないけど、でもノルだって分身したじゃないっ」

「俺は同郷の悪魔が相手だったから、手加減目的でやったんだ。はっきり言うけどな、ミランダに応用はまだ早い！」

「うっ……」

自分が杖の先端に宿した魔法の明かりに照らされながら、唇を噛むミランダ。その悔しそうな素振りを見上げつつ、

彼の囁きと呼応して、分身達も計四つの手で、少女を拘束。その間にも、各々が舌をのたくらせ続け、ミランダにふしだらな感覚を教え込んでいた。

「ひやっ⁉　待ってっ……多いってばっ……ノルっ！　こ、こんなのっ……身体中がっ……ひぃンっ……余計感じちゃうってばぁっ……！」

ついに始まってしまった三対一。

ミランダはパニックに陥り、めちゃくちゃにもがこうとするが、ノルも分身も、一層情熱的に、四肢や背筋を愛撫する。

ノルは薄っすら盛り上がった鎖骨のラインを丹念にねぶり、そこから顔を胸元まで下ろしていった。

縦横無尽に舌を駆け回らせながら、時折、唇を押しつけて強く吸う。そして、再び移動を開始。

少女の火照った肌は、薬が全部流れ落ちそうなほど汗ばんでおり、ノルが舌先に感じるのも、今や生々しいしょっぱさだ。そして、発散される甘酸っぱい官能の匂いによって、鼻腔までが満たされる。

ノルはそれこそ尻尾でも振りかねない勢いで、主人をしゃぶり、片方の乳首へも舌を伸ばした。

「そこはっ……だ、駄目ぇぇぇっ！」

えっちシーン試し読み ここからスタート！

突起は下着を脱がされた時以上にしこってきている。はち切れんばかりになったところを、細かなザラつきで摩擦すれば、一たまりもなかった。

「ぃふぅううっ⁉」

ミランダの背筋が反り返る。しなやかさを失った十指も、ノルの肩に食い込んでくる。

「胸ぇっ……壊れるっ……破裂しちゃいそっ……なのぉぉっ！」

このあられもない反応に、ノルは調子付いた。

ふんわりした柔肌の中、一箇所だけコリッと特別な感触があるのも魅力的で、彼は乳輪もろとも縁取るように、突起をなぞる。他にも乱暴に転がしたり、吸い上げてみたり。

「やだっ……ノルぅっ……ノルの……へ、へんたっ……ぃひゃぁあんっ！」

ミランダがいくらむせび泣こうとも、許さない。逃がさない。徹底的に追いかける。

もう一つの乳首も、指でいじくった。硬い感触を、摘み、突っつき、捻くって。合間合間に優しくさすり、相手の緊張が解けかけた瞬間を狙って、再び不意打ち。意地悪くつねり上げる。

「はひぃいっ⁉　引っ張っちゃっ……はぅぅうっ……吸っちゃ駄目っなのにぃいいっ！」

荒っぽくすれば、ミランダは電流でも流されたように竦みあがり、焦らすようにやれば、声を切なく引き伸ばす。

ノルが顔を上げると、分身二体も熱心にミランダをくすぐり続けていた。

後ろにいるヤツは、背中の広い範囲で淫猥な水音を立てている。
もう一体は細い美脚を抱え、腿といわず脛といわず、とことん舐め回す。
もはや、媚薬はすっかり取れて、代わって柔肌を照り光らせるのは、三人分の唾液だ。
（……エロ悪魔呼ばわりされても反論できないよな）
自分にそっくりな分身達の没頭ぶりに、ノルは内心苦笑する。が、ふっと嫉妬めいたものも頭をかすめた。
彼が口を休めた瞬間から、ミランダの意識は分身側に引っ張られてしまったらしいのだ。
「や……ぁあっ！　なんで……っ……身体中がこんなにっ……ぅうくっ！　それやだっ……やだやだぁっ！　ムズムズするのっ、やぁぁ……っ！」
二つの舌の蠕動に合わせ、救いを求めるようにしゃくり上げる美少女。
「……」
軽い嫉妬は子供じみた独占欲へ変わり、ノルは指を下方へスライドさせた。
次の狙いは乳首以上に弱い場所――陰唇だ。
臍の上から下着へ手を突っ込み、無遠慮にまさぐってみれば、じっとり湿った陰毛が指に触れる。割れ目があるのはその下で。
（お……っ）
息づくヴァギナは、上の口と同じく柔軟だった。

火のついたような熱を帯びているのも一緒。圧した分だけ凹んでしまうのも一緒。
そして、蜜のヌルつきと量に至っては、優に唾液を超えている。あてがった指先がツルツル滑ってしまう。
「これはもう、俺のことだけ変態なんて言えないぞ？」
ノルは口の端を上げながら、指を割れ目へ添わせて上に下に。
「ひぅううっ！　ひやっ……やはぁああぅううっ！」
言葉責めが効いたか、それとも股間への刺激が強烈すぎたのか、ミランダは群がるノルの分身達を押し返さんばかりに、手足を突っ張らせた。
首はいやいやをするように振られ、それと合わせて、汗と薬を吸ったツインテールの金髪も重く揺れる。
「ノ、ノルと薬のせいなんだからぁっ！　あたしっ、あたしはっ……んひゃぁああっ!?」
「人のせいにするんじゃない」
反論を封じるため、媚肉の谷間へ指をめり込ませた。そのままかき分けるように、グチュグチュ振動。
処女には少々厳しい力加減のはずだが、ミランダはもはや悦楽以外、感じられないらしい。もがく足の裏で、床を何度も擦り、叩いている。
「ふぁあっ！　ひあっ、ひっ、はひぃいっ！　もっ……おかしくなるぅううっ！　あたし

極小の蜜壷を抉られて、人間の言葉を話すことすら叶わなくなるミランダ。その声は盛った牝そのものだ。

ノルを苛む肉悦も、際限なく強まった。正直、彼でさえ怖くなるほどに。

それでも、使い魔は主人の痴態で勇躍し、本格的なピストンを開始する。

ズブグッ！　ニヂュヂュッ！　ズプッ、グポッ！　グブブブッ！

息を弾ませ、憑かれたように下半身を振り、時に捻りを加えて、臍（へそ）の裏近くを掘り上げる。肉壁の側面も引っ掻きまくる。

「ひおっ、ひおっ！　おおぉおっ！　んぐっ、つぁぁぁあっ！　あへぇぁあああっ⁉」

最初は快感を認められなかったミランダも、絶え間ない肉悦には抗いきれなかった。一突きごとに堕ちていき、何度目かの抽送を受けたあたりからは、ノルに掴まれていても尚、細い腰を揺らがせ始める。

「ひはぁあああっ！　ノルぅううっ！　どぉしよぉっ……あたひっ……止まんないぃ！　ノルのおちんちんっ……しゅごくてぇえっ！　ぃひっ……そこっ……ひいのぉおおっ！」

ようやく意味のある単語が出てみれば、それすらも快楽一色に染まっていた。

もはや、剛直に絡む処女血のみが、バージンだった唯一の証拠だ。その赤ささえも、止め処ない愛液によって洗い流されてしまいそうになる。

「……」

気ままシーン
試し読み
ここからスタート！

「……」
彼女のよがり声に吸い寄せられ、ノルの分身二体も動き出した。ミランダの顔を左右から挟み、向きあいながら膝立ちに。
その股間はノル本体同様、隆々とそそり立っていた。
頭上へ差す影に、ミランダは目を薄く開き、
「やはうぅうっ⁉」
即座に唇をわななかせる。
鼻先へ規格外の巨根を二本も出されたのだから、驚くのも当たり前。
しかし、彼女の動揺に、ノルは行動で答えた。
両手を取り、分身達の屹立へ導いて、
「そっちのは手で擦ってくれっ！」
殊更に腰遣いを激しくする。
「はひぃいいっ⁉　てっ……て、手でってぇぇぁあっ、ひはぁああんっ⁉」
質問へなど耳を貸さず、彼女を穿ちまくった。
二度、三度っ——四度、五度、六度っ——。
そんな執拗な催促に負けて、ミランダもとうとう動く。下からのピストンにギクシャク振られた手で、分身達の肉棒を握ってくれた。

もっとも実際に掴んでみると、逸物の硬さは、発情した少女にとって魅力的だったらしい。
「こっちのもすごぉっ……ぉおおっ⁉　熱いのぉおおっ！　ピクピクしてるぅううっ！」
彼女は積極的に竿の皮を伸び縮みさせ始める。
やり方自体はまだまだ稚拙で、何度も上下に走るだけでしかない。
しかし、ミランダが一心不乱に男根を愛でる姿は、ノルの昂りに直結した。もう分身との絡みを見ても、嫉妬など感じない。情欲のみが煽られる。
「分かるよなっ⁉　俺の全部はもうっ、ミランダのものなんだぞっ！」
飛び出すノルの咆哮に、ミランダは打ち震えた。そのすぐ後から、ガクガク頷きだす。
「うんっ！　ノルぅうっ、ノリゅうううっ！　ノルのおちんちんっ、あたしがいっぱいしてあげゅうううっ！　ぜんぶっ……ぜぇぇんぶあたしのなのぉおおっ！」
惚けた中に加わる得意げな声色は、まるで飼い主に褒められた子犬のよう。
健気な動きを受けて、分身のペニスも先走りをテラテラとこぼし始める。
液体は生の男性器が出すのと同じく、透明で、粘り気についても申し分なかった。粘着質な音を立てながら、手淫をスムーズなものに変えていき、一部は飛び散って、ミランダの可憐な顔を汚す。
ベチャリッ、グチョッ、ヌチョッ。

宙で糸を引いた液が、目元に当たると、
「ひゃううっ⁉」
ミランダは避けるように顔を傾けた。
しかし、彼女は嫌悪を感じたのではない。目をかばおうとしただけだ。
その証拠に、彼女はまぶたを閉じ、代わりに口を開く。舌を突き出す。
「んはぁぁあおっ！」
溢れる喘ぎは意味をなさないが、淫らな表情は彼女の願望をはっきり表していた。
『もっとかけて！　いっぱい出して！　飲ませてぇっ！』
「ミラン……ダッ！」
ノルが律動を開始してから、すでにかなりの時間が経っている。こんな物欲しげな表情まで見せられたら、彼は悪魔の身でありながら、魂まで吸い取られそうだ。
分身二体も、落ち着かなげにモゾモゾ身を捩りだしている。
元々、こいつらは性欲の発散を目的に作ったので、快感にはめっぽう弱い。
陰茎の皮を伸ばされては、クッと腰を前に曲げ。手の側面でエラを直撃されては、肩を竦ませて。
その間にも我慢汁はミランダの上にポタポタ垂れていた。一部は望みどおり、舌へへばりつき、喉の奥まで滴り落ちる。

「うっ……ぇぇあっ！　んぐっんぐっ、ゴクンッ！　うぷぅううあぁっ！」
不器用に舌を波打たせ、汚液を嚥下するミランダの童顔は心底幸せそうだった。
「っ……！」
見下ろしていたノルの怒張の付け根で、子種が泡立つ。尿道は広がりかけている。
オルガスムス前特有の焦燥も、むやみやたらと募ってきた。
肉欲が限界を振り切り、彼は叫んだ。
「ミランダっ、俺っ、イクぞっ！　このままミランダの中で、イクッ、からなっ！」
そう怒鳴るうちにも、速度を上げてのラストスパートを開始している。
力が増せば、亀頭は一層上向きとなり、肉壁へめり込んだ。表面に広がる牡粘膜は、ことごとく肉筒に擦られて、痛いほどの疼きに苛まれる。
愉悦はペニスに収まりきらない。脊髄を侵し、脳天までも沸騰させる。
その間、精液は睾丸から送りこまれ続け、ノルは肉竿が重たくなるほどだった。鼓動は激しくなり、続く射精のものすごさを理屈抜きに予感させられる。
分身達も絶頂を渇望して、自分の黒い手をミランダの手にかぶせていた。そうやって、手コキの速度を倍近くまで上げる。
三方向から貪欲に求められ、ミランダの口の両端が淫蕩な形につり上がった。
彼女は理性を失っていた。好意を抱く相手から寄ってたかって犯される悦びに溺れきり、

「イッてぇぇえっ！　ノりゅぅっ！　おひんひんっ、だしてぇぇへぇぇっ！　いっぱいっ、じぇんぶぅぅぅっ！　あらひもっ……イふっ、イクふぅぅぅぁぁぁぁぇぇえあああっ！」

伸ばした舌を噛みそうな危なっかしさで、あられもなく喚きたてていた。

その手が身震いした拍子に、脆い裏筋をピンと伸ばす。

腰も肉棒をめいっぱい捻る。

「ミラ……っ⁉」

落雷に全神経を焼き尽くされたような法悦。

ノルは息が詰まり、バネ仕掛けのように腰をはね上げた。それがミランダの子宮口へも、最大級の突きを叩き込む。

「ひふぎぃぃひいいぃぃいっ⁉」

「出っ、るっ！」

ミランダの舌が引っこみ、唇が噛み締められた。眉間には皺が寄り、背筋はビクビク痙攣しながら、不格好に反り返ろうとする。

ノルもヴァギナへペニスを突っ込んだまま、みっともなく天井を仰ぐしかない。

誰もが行動不能に陥った中、三つのペニスだけがグッと盛り上がった。すでに最大サイズだったはずのそれらは、破裂せんばかりに先端部を肥大化させ、さらなる急角度を描き、もはや、ミランダの手や肉裂に収まりきらなくなりそうだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/